

2015 年研究旅行奨励制度



装飾の世界観

—螺旋と写本から見る西洋文化—

17AR073 城丸瑛梨佳 17AR093 飯田満里奈

—目的地—

フランス（パリ）、イタリア（ヴェネツィア、モデナ、ローマ）

—研究目的—

人類の歴史のなかで繰り返し使用されてきた装飾意匠のなかには、文化の変わらぬ型や本質を示すものがある。ひとつの特徴的な形状を原型とする意匠が、様々な場面で時代を越えて登場するとき、それは、もはや単なる気まぐれな形や飾りではなく、固有の文化の世界観や自然観、そして死生観を映し出す可能性を秘めている。ところで、ヨーロッパや地中海世界の歴史・文化のなかでは、蔦が絡まるような〈渦巻き〉や〈螺旋〉の装飾意匠が、時代を越えて随所に登場するという。比較神話学者の篠田知和基氏は、このような渦巻き形状を原型とする〈螺旋〉の形が「ヨーロッパの文化の核をなす象徴的フォルムであった」と指摘している。（『ヨーロッパの形—螺旋の文化史—』八坂書房 2010年）。

本研究旅行は、この〈螺旋〉意匠に注目しながら、ヨーロッパ地中海世界のイタリアとヴァチカン市国、そしてフランスの文化遺産を訪ね歩き、その作例や資料を収集・観察・分析することで、〈螺旋〉の奥に潜む意味や精神を明らかにしようとするものである。なお、その際に、研究調査の軸として主に2つの領域の調査対象に絞り込む。

ひとつは、建築空間の装飾にみられる〈螺旋〉である。たとえば、ヴァチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂の主祭壇には、バロックの巨匠ベルニーニによるバルダッキーノ（天蓋）が聳え立っているが、その4本の柱は異様なほどに波打つ螺旋状の〈ねじり柱〉で構成され、訪れる者を圧倒している。柱の機能としてはまっすぐな柱でもよいはずなのに、そこでの〈螺旋〉意匠の必要性はどこにあるのだろうか。教会建築での同様の〈ねじり柱〉は、ローマ市内サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ教会・修道院回廊にも登場する。また、同じくローマ市内サン・クレメンテ教会のアプシス（後陣）装飾では、巨大な「勝利の十字架」の周囲の空間を、大きな渦巻き状の蔦のモザイクがびっしりと埋め尽くしている。教会堂内部のアプシスの装飾として、十字架と渦巻き蔦にはどのような関係と意味があるのだろうか。

一方、もうひとつの調査対象は、彩色写本の装飾における〈渦巻き〉である。三次元的〈螺旋〉は、平面的二次元の写本装飾では〈渦巻き〉として表現され、どちらも同じ意匠に属するものである。中世・ルネサンスの写本には、文字だけでなく扉絵や挿絵の装飾が施されたものが多い。そこに渦巻き模様や蔦や葉が文字に絡まるような装飾、更に余白部分における草花や聖人などの「挿絵」が度々登場する。キリスト教の聖書写本や典礼写本に多用される〈渦巻き〉装飾の意味と役割は何なのか。

このように、「建築」と「写本」という大きく異なった領域において、同じ〈螺旋〉の意匠を調査・分析していくことで、ヨーロッパ地中海世界の文化の型としての〈螺旋〉に潜む象徴性、そしてその多様な形態と意味の重なりを少しでも明らかにすること、それが私たちのこの研究旅行の主たる目的である。

この研究目的のもとに螺旋意匠の研究調査を行うにあたって、私たちは「建

築」と「写本」という二つの分野について、それぞれの関心に即して、主として前者を城丸が後者を飯田が担当することにした。このように役割分担を明確化することによって、研究旅行出発前の事前研究や事前調査などは個別に専念しながらその成果をもち寄り、また、調査旅行の具体的計画と実施は共同で行うなど、全体を効率的・効果的に進め、二人で行う共同研究としての性格と利点を最大限に活かすように心がけた。

一日程一

	滞在都市	行動内容・調査対象
8月24日	福岡→パリ	移動
8月25日	パリ	マルモッタン・モネ美術館 ノートルダム大聖堂
8月26日	パリ	ペール・ラ・シェーズ クリュニー中世美術館
8月27日	パリ→ヴェネツィア	移動 サンタ・マリア・デッラ・サルデーテ教会
8月28日	ヴェネツィア	サン・マルコ大聖堂 マルチアーナ図書館
8月29日	ヴェネツィア→モデナ	移動
8月30日	モデナ	モデナ大聖堂
8月31日	モデナ→ローマ	移動
9月1日	ローマ	サン・ピエトロ大聖堂 ヴァチカン美術館 サン・クレメンテ教会
9月2日	ローマ	サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂
9月3日	ローマ→福岡	移動
9月4日	ローマ→福岡	帰国

1. 聖なる場に姿をあらわす〈螺旋〉とは

■はじめに

〈螺旋〉は「回転運動」にもとづく意匠である。本研究調査では、この「回転の意匠」を二次元と三次元という二つの異なった世界から捉えようと試みている。一つは建築空間（三次元）にあらわれる〈螺旋〉であり、もう一つは写本や挿絵（二次元）にあらわれる〈渦巻き〉である。この〈螺旋〉や〈渦巻き〉の意匠やデザインは、人類の文化の様々な分野で、基本的で原初的な形状要素として出現する。そして、西洋の文化もまた、その例外ではない。

例えば、食の領域では、ひねりパスタやねじりドーナツ。服飾領域では、西洋のドレスや帽子などを華やかに飾る渦巻状に巻きつけられたレースやリボン。さらに、建築空間でも、宮殿や個人邸宅の装飾的な飾り柱や螺旋状の階段、そして、椅子やベッド、調度品などの脚や取手にさえねじり柱や渦巻き装飾を目にすることができる。

本研究テーマの事前研究の段階で、すでに、西洋の様々な文化領域のなかに、〈螺旋〉のデザイン要素が驚くほど多く使われていることに驚かされた。そして、同時にそこから、では「なぜ、それらはねじれていなければならないのか」、「ねじれていることの必然性はどこにあるのか」という疑問を抱くようになった。建築領域の〈螺旋〉に限定すると、何かを支える柱などに関しても、機能性重視という現代的な価値観や視点から考えれば、まっすぐな形状でも十分なものも多いのだが、西洋の「ねじり柱」は、時に何重にも複雑にねじれながら出現する。また、歴史的建築空間の階段などの〈螺旋〉は、作品によっては、訪れるものを圧倒し感動させるほどの迫力を有している。事前研究や事前準備を重ねるごとに、ますます、〈螺旋〉の魅力と意味をもっと知りたいという思いを強くした。

以下、本研究旅行で訪ね歩いたイタリアの建築空間にみられる〈螺旋〉について、その具体的な歴史的作例を紹介しながら、その「回転する」〈螺旋〉意匠の特徴や多様性について報告する。

図 1 ヴァチカン美術館内の螺旋階段
(城丸撮影)

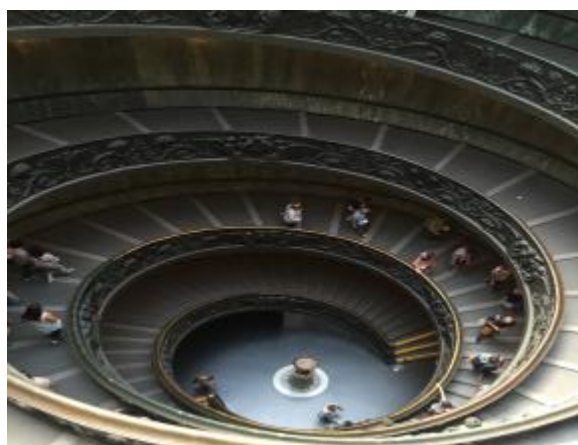


図 2 サン・ピエトロ寺院クーポラからの景色
(城丸撮影)



■イタリア・ローマの教会建築

—サン・ピエトロ大聖堂—

まず最初に、イタリアのローマに位置する世界で最も小さな国、ヴァチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂について報告したい。大聖堂内に入ると、訪れた誰もが魅了される大天蓋（バルダッキーノ）がドームの真下に聳え立っている。バルダッキーノとは、約20メートルもある4本のねじり柱で主祭壇を囲み、真上の大天蓋を支えるといった記念碑的構造物で、このサン・ピエトロ大聖堂のものは、バロック時代を代表する芸術家のひとりジャン・ロレンツォ・ベルニーニが、旧バジリカのねじり柱を模倣してつくったとされる。

ベルニーニがこの大天蓋（バルダッキーノ）をつくる以前から、地下にはローマで殉教したとされるペテロの墓が当時のまま保存されていたと言われる。最初のサン・ピエトロ大聖堂は、紀元4世紀、ローマの皇帝コンスタンティヌスによるキリスト教寛容令（ミラノ勅令、313年）の後に、ペテロの墓の上に建設されたと考えられており、後に、ルネサンスからバロック期にかけて、現在の巨大な聖堂に再建された。この聖堂は、イエスの第一世代の弟子である使徒たちの最長老であったペテロの墓を記念して建設されたというその性格上、聖堂のなかで一番重要な主祭壇の真下に、ペテロの墓が位置するように設計されている。そして、聖堂の主祭壇の真上には、あのルネサンスの巨匠ミケランジェロが設計し現場監督も務めたことで知られる巨大なドーム状のクーポラがつくられている。つまり、この聖堂建築空間は、主祭壇の真下の地下に位置する使徒ペテロの墓から、天上界や宇宙を象徴する主祭壇の真上のクーポラまで、その中心的な垂直方向の重要な軸線が目には見えないが確実に存在している。それは、天と地と地下との繋がりを示すものである。そして、その地下と天上を結ぶ地上の主祭壇を守るように聳え立つ構造物が、今回、特に重要な〈螺旋〉の研究調査対象として選んだ、ベルニーニによる大天蓋（バルダッキーノ）なのである。

今回の研究旅行で、実際に現地で巨大なバルダッキーノを目の当たりにしながら詳しく観察していると、出発前に大学図書館で勉強した美術大全集の図版では十分には理解できなかった以下のことがらが確認できた。すなわち、バルダッキーノの各柱本体は、それぞれほぼ6重にねじれを重ねており、また、ねじり柱には、それぞれ3種類の異なった装飾意匠が施されている。（図3）

下から順に見ていくと、一番下の部分は螺旋柱にさらに細かく何本もの螺旋装飾が刻まれていた。それはまるで、何匹もの蛇が柱に巻きついているかのようであった。次に、真ん中の部分は絡まった蔦の装飾が施されているが、その絡まり自体も螺旋形であることが今回確認できた。そして一番上の部分にも、その蔦が継続して絡まっている。比較神話学者の篠田知和基氏によると、その最上部の蔦には、さらに、鳥も描かれているとのことであった（『ヨーロッパの形—螺旋の文化史—』八坂書房、2010年）が、今回、

下からの肉眼による観察では、その鳥を発見することはできなかった。しかし、篠田氏が指摘するように、実際に鳥も描かれているというのであれば、地下から地上、そして天空のドームへ向かう垂直方向の上昇を表現する要素として、バルダッキーノのねじり柱が採用され、そこに、さらに鳥たちの姿を刻むことで、天空への飛翔や上昇を強調した可能性も十分に考えられるだろう。

このように、今回、サン・ピエトロ大聖堂の歴史について学び、加えてバルダッキーノの現地調査を実施したことで、この柱には、何の理由もなしに「ねじれ」が施されているのではなく、聖堂祭壇部の宗教的空間を構築する際に意図されたと考えられる地下・地上・天を繋ぐ思想的・宗教的文脈のなかで、ねじり柱の〈螺旋〉の意匠が、力強い上昇性を生み出していくという重要な役割を担っていることが、体験的に理解できた。

しかし、この一例のバルダッキーノだけでは、「ねじれ」の意匠がもつ宗教的意味や象徴性を十分に考察することはできない。そこで、サン・ピエトロ大聖堂以外のその他の教会建築に存在する〈螺旋〉の作例を求めてイタリア各地とフランスのパリを訪ね歩き、調査することにした。数多くの〈螺旋〉を見て回ることで、何か特別な意味合いを発見することができるのではないかと期待も抱きながら、調査旅行を進めた。

図 3 バルダッキーノ（城丸撮影）



図 4 バルダッキーノ真上のドーム（城丸撮影）



2. フランス（パリ）の〈螺旋〉

■ノートルダム大聖堂

フランスのパリに到着し、まずノートルダム大聖堂へと向かった。本来、ノートルダム大聖堂には西正門の上に彫られたエデンの園の知恵の木に蛇が絡まった姿があり、研究対象の予定であったが、肉眼で発見することができなかった。しかし、現地まで足を運ばなければ分からない新たな発見もあった。

図 5 ノートルダム大聖堂（城丸撮影）



写真は、大聖堂の入り口付近の門である。これはおそらくブロンズ（青銅）で造られた唐草の装飾であろう。一つの渦巻きから、次から次へとまた新たな渦巻きが描かれていた。それは決して一つではなく、過剰で細かな装飾が施されていた。そして、この装飾が大聖堂の入り口で発見できたということは、教会に訪れるものと聖母マリアとを結び付けている象徴のようにも感じた。

■パール=ラ=シェーズ墓地

街の中を歩いていると、とても高い壁に囲まれ、異空間的な敷地が壮大に広がっていたそこは、パリの中で最も大きい墓地、パール・ラ・シェーズである。死者を埋葬するこの場所にも〈渦巻き〉の装飾が発見できたのである。3つの写真の渦巻きはどれも同じ形をしている。この先の部分だけ渦を巻いている渦巻きを「ヴォリユート」とも言う。そもそも「ヴォリユート」とは階段の手すりの端が渦巻きとなっているものことであり、他にもヴァイオリンの先の部分の形というように至る所に存在している。



図 6 パール=ラ=シェーズ (城丸撮影)



図 7 パール=ラ=シェーズ (城丸撮影)

しかし、それだけではなく西洋では墓地や教会といった領域にも装飾として施されているのである。これは日本の墓場では見ることができない、西洋文化の装飾模様と言えるだろう。

パール・ラ・シェーズで見たヴォリユート形〈渦巻き〉はノートルダム大聖堂で見たブロンズの唐草の装飾と同様、渦巻きは一つではなく、必ず複数の〈渦巻き〉で墓という聖なる空間を装飾していた。一つ一つの墓に十字架

が存在しているのと同じ様に、渦巻きも必ずなくてはならない存在のように感じた。

■パリで見る〈螺旋〉のまとめ

パリの街中を歩いているとき、私たちは偶然にも〈螺旋〉と出会ったが、実はそれが、初めて目にしたものであった。予想もしなかった発見と同時に、日本では決して見ることのできない光景であるとも感じた。パリの街を歩いても、教会に行っても、お墓参りに行っても、私が目にするその場所には〈螺旋〉が装飾として西洋文化の中に根付いていた。そして、教会という聖なる領域に存在する〈螺旋〉が、死者を弔うお墓にも存在していたということはとても重要な発見であった。それはまるで、死者と生きている者を結びつける役割を担っており、聖なる場所を守る象徴のようであった。

図 8 パリの街中（城丸撮影）



3. イタリアの〈螺旋〉

■サンタ・マリア・デッラ・サルデーテ教会

フランス・パリからイタリア・ヴェネツィアへ移動し、初めにサンタ・マリア・デッラ・サルデーテ教会へ向かった。実はパリのペール＝ラ＝シェーズ墓地で観察したヴォリュート形〈渦巻き〉が教会のファサードの脇部分の装飾にも発見することができた。先ほどと少し形が違うようにも見えるが、これもヴォリュート形〈渦巻き〉の一種として紹介されていた。今回の〈渦巻き〉はパリでの〈渦巻き〉とはまた異なり、一つ一つの渦巻きが教会建築の装飾の一部として存在していた。

図 9 サンタ・マリア・デッラ・サルデーテ教会 (城丸撮影)



あまりにも高い場所に〈螺旋〉があったため、細かな部分まで観察することは出来なかったが、新たな考察もできた。先ほど触れたファサードとは建物正面部分のことを言い、建築のいわば顔としての役割を持つと言える。そのような重要な一部分に〈螺旋〉があるということも何か大きな意味合いがあるのではないかと感じた。そして、前回までと違い〈螺旋〉の存在感が薄いようにも感じた。今までの〈螺旋〉は過剰な装飾で、見る人々にどこか強い存在感をあらわしているかのようであったが、今回の〈螺旋〉は存在感が薄く感じるものの、実は重要な建築要素の一部として役割を果たしていた。

■サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂と

サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ大聖堂

ヴェネツィアから最後の都市であるローマに移動してきた。今回の研究対象の軸でもあるサン・ピエトロ大聖堂のバルダッキーノと同じような螺旋柱をイタリア・ローマの教会でいくつか発見することができた。まず、訪れたのがローマの五大バシリカの一つであるサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂である。紀元313～318年、コンスタンティヌス帝がキリスト教徒のために最初に建てたカトリック教会の聖堂である。13世紀前半にローマのヴァサレット親子によってコズマティー様式の回廊が建設された。

図 10 サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂（城丸撮影）



そして他にも、同じく彼らによって建設された〈螺旋柱〉付きの回廊がローマに存在していた。そこがサン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ大聖堂である。この教会もローマの五大バシリカの一つである。この二つの教会には共通点がみられる。それは、コズマティ様式と言われるモザイク模様が二本のねじれた大理石の円柱にはめ込まれているという共通点である。

図 11 サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ大聖堂 (城丸撮影)



ここでの〈螺旋〉は様々なねじれ方をしていた。単に垂直軸にねじれているだけでなく、その軸自体も少し強弱をつけて波のような形を施していた。その連続した〈螺旋〉はどれも一つ一つ形や装飾が異なっていた。

さらに、この二つの〈螺旋柱〉はバルダッキーノの時とは少し違っていた。教会という聖なる領域には存在するが、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂とサン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ大聖堂では、教会の回廊空間に〈螺旋柱〉が存在していた。回廊空間とは〈コルティーレ〉という中庭空間が中央にあり、それを囲むかのように〈ポルティコ〉と言われる柱で支えられた屋根のある通路が存在している空間のことである。教会内部とは異なり、この開放的な空間を歩くとどこか落ち着きや癒しを感じ、中庭を見上げると天空とのつながりも感じられた。そのような空間に〈螺旋〉が連続したリズムをもって存在していた。

■サン・クレメンテ教会

同じく、ローマ市内にあるサン・クレメンテ教会にも前庭回廊があり、そこで〈螺旋柱〉を発見することはできるが、今回この教会で注目した〈螺旋〉とは教会内部の方である。それは、コズマティーフ様式の装飾で施された「十字架の勝利」である。あいにく、教会内では撮影禁止だったため、写真は当該教会で購入したポストカードを撮ったものである。

図 12 「十字架の勝利」(ポストカードより)



この「十字架の勝利」はロマネスク時代の中でも最も優れた作品の一つであり、一種のモザイク装飾であるコズマティー様式が施されている。白大理石や色大理石、そして後にはガラスや金の鍍金を施したガラスなどのテッセラで構成されている。常に装飾的かつ非具象的であるコズマティー様式は回廊、舗床モザイクや祭壇天蓋などといったところでよく目にするることができる。

観察するには遠く、あまりにも細かな装飾だったため、ここではポストカードがとても役に立った。十字架の周りには一面に張り巡らされた葡萄の枝、そしてその間には鳥やシカやラクダのような動物、天井中央には「神の手」やキリストが磔にされている十字架、その下には光輪のある羊を合わせた12匹の羊たちがいる。まるで楽園のように描かれたこの空間は、もう十分だろうと言わんばかりに数十個の渦巻きが連なっていた。それは、一度ペール=ラ=シェーズ墓地で観察した十字架と渦巻きが一緒になっている装飾とどこか似ていた。

そして、少々分かりにくい12匹のラクダの隣にある柱にも注目してほしい。実はここでの柱も〈螺旋〉のように描かれているという新たな発見をすることができた。これほど多くの渦巻きがあるのにも関わらず、しつこく柱までも〈螺旋〉というこの発見にさらに興味深さを感じた。

■回廊空間に見る〈螺旋〉のまとめ

イタリアでの〈螺旋〉は、教会内部と回廊空間に限定した調査であったが、フランスのものとは異なった意味合いがあるものではないかという印象を受けた。

聖堂内と異なり、接した回廊という自然の中の開放空間の〈螺旋〉は、祈りのため教会を訪れた者たちが癒しを求める異次元の空間を演出するために使われていたのではないか。そこでの〈螺旋〉は、訪れた人々の心に落ち着きをもたらす造形であったのではないだろうか。現地で実際にその場に身を置いてそのような印象を得た。

図 13 回廊空間（城丸撮影）



■システィーナ礼拝堂

そして、最後に、ヴァチカン市国にあるシスティーナ礼拝堂に描かれたひとつのフレスコ画について報告したい。というのも、この作品が、〈螺旋〉の意匠を考察する上で欠かせないものであると考えるからだ。

すでに冒頭で引用したように、篠田知和基氏は、西洋文化におけるイメージ意匠の基本形のひとつが〈螺旋〉にある可能性を指摘し、さらに、そのキリスト教的意味での〈螺旋〉の意匠は、サン・ピエトロ大聖堂のバルダッキーノより、そこに隣接したシスティーナ礼拝堂の天井にミケランジェロによって描かれた「天地創造」の一場面の方に、螺旋の根本が存在しているかもしれないという。ここで篠田氏が指摘する問題の場面は、「天地創造」の主題で描かれた一連の壁画場面のなかにある「原罪/楽園追放」図である。そこで、本研究旅行では、サン・ピエトロ大聖堂のバルダッキーノとあわせてシスティーナ礼拝堂を訪れ、篠田氏が指摘した作品の観察調査を実施した。

図 14 「原罪/楽園追放」(ポストカードより)



システィーナ礼拝堂は、時の教皇ユリウス二世が自分の墓碑を制作させるために1505年にローマに招聘したミケランジェロに制作させたもので、その天井画全体の中央に「創世記」の主題が描かれている。この「創世記」の作品は、大きく9つの場面に分割されており、さらにそれらが、第1から第3までのグループに分かれている。

篠田氏が指摘した問題の「原罪/楽園追放」の場面は、「アダムの創造」「エヴァの創造」とともに第2グループの3つの場面を構成するひとつだ。

ここで、この壁画について、イギリス人研究者エドモンド・リーチが1958年に提出した、興味深い構造主義的解釈の可能性について短く言及しておきたい。リーチは、天井画の「創世記」の3つのグループの中に描かれた「原罪/楽園追放」グループについて、そこには、アダムとエヴァの図像を通して「楽園/両義性」が象徴されているという。実は、前述の篠田氏もまた、リーチが指摘したこの場面の「両義性」に注目しており、「原罪/楽園追放」図には、「蛇が身体を絡ませる知恵の木と左側に豊かな緑の枝を伸ばす生命の木が、十字架を想起させる形態で描かれており、〈生と死〉の両義的シンボルを形成している」という。

そこで、今回、実際にシスティーナ礼拝堂を訪れた際に、上記2人の研究者が共通して指摘するこの「両義性」に特に注目しながら、問題の壁画の場面を観察したが、残念ながらそこに、対比された〈生と死〉のシンボルといった「両義性」を、中心的な意味内容として読み取ることは、筆者には困難であった。筆者自身が、この場面から素直に感じ取ったことからは、〈生と死〉の対比というよりは、楽園から追放されることがすでに暗示されてしまった深い悲しみであるように感じた。さらに、篠田氏が指摘するような、人間のような蛇が木に螺旋のように絡まるその姿を「十字架」として見ることは、残念ながら、筆者には理解し難いものであった。

確かに、事前調査の資料を読み進めていく段階では、十字架と想起することも納得する部分はあった。しかし、実際に現地で観察調査していく過程で、研究者が指摘することがらと筆者自身が作品から感じ取る感覚や印象との間に大きな差異があることを意識せざるを得なかった。それが、何に起因しているのか、そのギャップはどこから来るものなのかはまだ良く分からない。

この研究旅行の中で筆者は、たくさんの〈螺旋〉を調査してきた。その〈螺旋〉たちは、出会う場所場所で各々の役割を担っていた。この研究旅行の間中、ふと街中で目に付いた〈螺旋〉の意匠は、私の足を止め、それまで全く知らなかったモニュメントの詳細な観察を始めるきっかけとなった。教会で出会った〈螺旋〉は、その意匠が施された聖母マリアと私を繋いでくれる役割を担い、お墓で出会った〈螺旋〉は、ある意味、死者と私を結び付けてくれた。

■まとめ

今回、初めて自ら現地に足を運び研究調査を行った。事前に計画を立てて行動したが、予期せぬアクシデントが起き、当初予定していたものを見るができなかったこともあった。しかし、文献や資料だけで考察していくよりも、実際に作品や建物を目で見ることで、事実の確認や新たな発見、新たな閃きといった、今後の卒業論文成作に役立つことがらを多数得ることができた。また、先にも言及したが、実際に現地で調査していく過程で、事前研究で理解していた研究者の指摘する解釈と、筆者自身が作品から感じ取る感覚や印象との間に、時に大きな差異があることも意識させられた。自分の勉強不

足も大きな要因であることは否めないが、そのような差異への疑問も大事にしながら、さらに今後の研究への課題としたい。

<参考文献>

- ・安田喜憲 『蛇と十字架—東西の風土と宗教』人文書院, 1994年
- ・実存思想協会編 『かたち—実存思想協会論集XI』理想社, 1996年
- ・竹内裕二 『イタリア修道院の回廊空間—造形とデザインの宝庫 ロマネスク、ルネサンス、バロックの回廊空間』彩流社, 2011年

—研究報告—

彩色写本（飯田満里奈）

はじめに

彩飾写本は、一般に、装飾された書体や色鮮やかな文様・挿絵をともなった写本のことである。特徴はその装飾性にあり、中世前期の複雑な装飾は奔放なまでの躍動感にあふれている。しかし、それがいかに「装飾的」で「奔放」であろうとも決してその構図は無秩序ではない。個々の装飾は幾何学的な枠組みによって明確に割り付けされている。現存する作品のほとんどがキリスト教美術に属するものであり、そこには聖書解釈に基づく明確な世界観や秩序が展開されている。

ケルト美術研究家の鶴岡真弓氏によると、彩色写本について、「文字や装飾は個々の枠内を埋め尽くしながらも輪郭線を逸脱することなく、色とりどりの彩色も決して相互に混じり合うことはない。装飾意欲とともに厳格な信仰態度が反映されている」と指摘している¹。

そこで研究旅行では、実際に、集中的に、できるだけ多く歴史的彩飾写本の作品を訪ね歩き、その装飾の多様な文様の特徴を観察しながら作品データを収集することで、彩色写本について理解を深めようと考えた。というのも、筆者は、以前からこの彩色写本に興味を持ち、4年次に執筆する卒業論文のテーマとして準備して設定していたからだ。すなわち、彩色写本という美術ジャンルの作品が、なぜ発生し、どのように機能し、それがどのような意味をもっていたのか、という筆者の卒論テーマの考察課題に向かう研究準備として、本研究旅行を位置づけようと考えた

とはいえ、彩色写本とひとことで言っても、その作品の種類や特徴は様々だ。そこで、今回の研究旅行奨励制度に参加するにあたっては、同じゼミ生で建築要素としての〈螺旋〉に興味を持っていた城丸さんとの共同研究として、写本のなかにみる〈螺旋〉や〈渦巻き〉に注目しながら、彩色写本を捉えてみたいと考えた。

以下、本研究旅行で訪ね歩いたイタリアとフランスに現存する彩色写本の作例について、そこに登場する螺旋や渦巻装飾に注目しながら紹介し、写本という二次元における螺旋や渦巻の多様性について報告する。

今回の研究調査では、この他、マルチャーナ図書館とエステンセ図書館所蔵の彩色写本を観察調査することを楽しみにしていたが、前者は、一般には公開されていない写本閲覧の許可を取得できなかったこと、後者は休館中であったことから、残念ながら訪れることができなかった。次の機会の研究課題としたい。



図1 aprile 1657
Miniature a piena pagina
コッレール美術館
(撮影 飯田)

1 マルモッタン・モネ美術館

彩色写本の中には、装飾の施された文頭の文字や聖人のイニシャルなどが、後の時代に切り離されて散逸したものも少なくない。マルモッタン・モネ美術館に貯蔵されているものには、そのようなものが多く存在する。ここでは、そのような作品の装飾された文字を中心に見ていく。

図2をみてほしい。これは15世紀前半に描かれたもので、アルファベットの「A」を装飾したものである。「A」の右下の部分には小さい、けれど大人数の教父たちが祈っており、その祈りが聖ベネディクトに伝えられている。聖ベネディクトの右手の上にはニンバスを持った小さな聖人が裸で描かれ、その聖人の両手の先からまるで泉が湧き出すかのように螺旋の装飾を伴い左右両脇に展開されている。その湧き出すような図像描写の一つとして、螺旋模様が使用されている。

また、図3ではアルファベット「O」の文字の中に、神が星を創っている場面が描かれている。この文字の装飾としては、「O」の文字の中で神が星を創るイメージとその聖域のまわりを囲む金の装飾、その外側に螺旋の模様がある。そしてこの絵では見づらいが、四方から延びた葉の先が渦を巻いており、「O」に絡みついている。この葉の渦巻いている様子は文字のまわりの施されている金地を越えた文字領域まで浸潤している。



図2 Olivetan Master
initial A. Saint Benedict
offering His soul to God
first half of the 15th century
『Illuminations FROM THE
WILDENSTEIN VOLLECTION』 P22

「A」と「O」の二つの装飾文字の作例を観察する中で、そこでは、螺旋には神の聖域と人の領域といった、空間と空間、領域と領域を繋ぐ役割があるのではないかと筆者は考えた。神の聖域と人との間には確実に境界線があるのだが、その隣に螺旋の模様があることで、神の領域へ祈りや信仰を届けることができるようになる。特に図2では、巻紙のような白地の上に文字が書かれており、その両端の巻紙にも一種の渦巻が存在しているとみると、一つ目の渦巻を通して祈りは聖ベネディクトに伝えられ、さらに二つ目の渦巻を通して「A」の文字の境を繋ぎ、神へと祈りが届けられている。一方図3では、聖書に綴られる信仰が、四方から延びた葉の渦巻や文字の中に登場する螺旋を通じて神のもとに届けられているようにも見える。



図3 Sano di Pietro
initial O. Got Creating the Stars
15th century
『Illuminations FROM THE WILDENSTEIN VOLLECTION』P18

2 モデナ大聖堂付属美術館

写本の中には、紙の一面を文字で埋め尽くすものもあれば、余白部分を残してそこに挿絵や装飾を施したものもある。モデナ大聖堂付属美術館では、マルモッタン・モネ美術館で見た大きなアルファベット文字の装飾やばらけた写本のページだけでなく、細やかな文字装飾や挿絵の入った一冊にまとまった写本を見ることができた。ここでは、モデナで見た写本の装飾について見ていきたい。

図4は福音書写本である。こちらはところどころアルファベットの文字の装飾と別に、ページ下部に組紐のように絡



図4 Evangelistary
Nonantola, early XII century.
Modena, Capitular Archive, cod. O. IV. 1
(撮影 飯田)

まった紐で動物が描かれている。同じようなものとして、ケルト美術における動物組紐文様がある。先にも言及した鶴岡氏による『ヨーロッパの装飾文様』¹¹によれば、動物文様はもともと北ユーラシアに広まった遊牧系騎馬民族の意匠で、動物を神々とみる信仰であったが、それがケルトの渦巻と出会うことで動物組紐文様へと発展したという。この写本の装飾には、ここで鶴岡氏が指摘するような動物組紐文様の影響が見て取れるように思う。

図5、図6は楽譜で、歌詞とみられる文字に装飾が施されており、図5では「D」の文字の装飾が、図6ではHとSの文字が見て取れる。特に図5では、枠の外側のページ下部の紋章を囲むように始まった蔦草が、枠の中のDの文字に絡みついている様子が分かる。聖書だけでなく聖歌の楽譜にまであらわれる渦巻は、まるで人々の祈りを絡めとりながら天に届けるようにもみることができるようであった。

図 6 Gradual
second half of the 12th century
ACOMo 0. I. 16 (撮影 飯田)

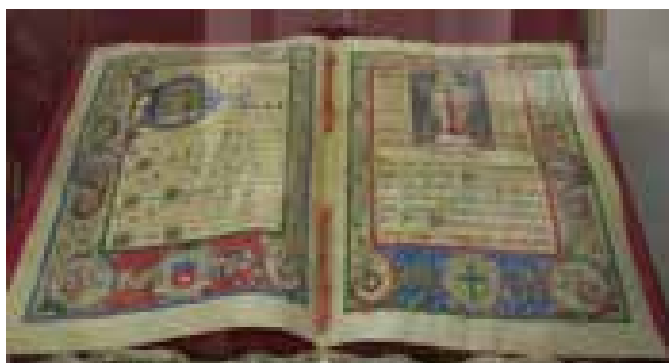
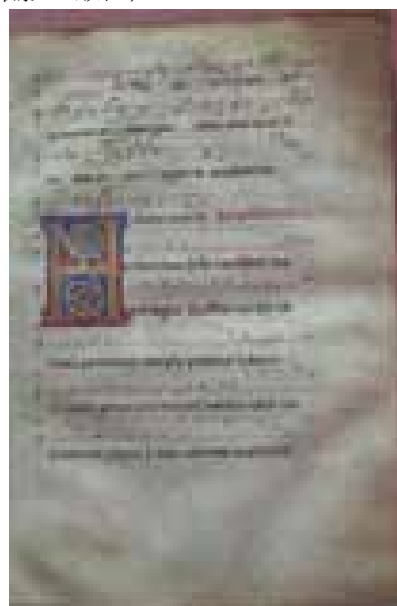


図 5 Cartegloria
See. XVII
Legno dorato (撮影 飯田)



3 サン・マルコ寺院

ここでは写本ではなく、バシリカの装飾から見る渦巻について見ていく。

図7は聖母マリアとその訪問者を描いたバシリカの写真である。上部を見ると、円形の中に聖母マリアと聖人が描かれており、その周りと中央部に描かれた絵を縁取るように蔦草が描かれている。

図8は、画面左右の円形の中に人物が描かれており、その縁取りの線はねじれて周りの装飾と混じり合い、更に中央の十字架型の装飾の一部へとつながっている。

この二つのバシリカの共通点は円の中に描かれた聖人と、その周辺に描かれた蔦草の“渦巻”、そしてその近くに描かれた別の空間（絵）である。先に、筆者は、写本の装飾からみた渦巻には空間と空間、違う領域同士を繋ぐ役割があったのではないかと推測した。ここでも、同じ役割に注目してみていくならば、教会建築のバシリカにおける蔦

草の“渦巻”の役割は、聖人と聖人を結び付けるものであったと言えるかもしれない。特に図8では、外側の円の中に描かれた聖人と十字架の中に描かれた聖人に分けられる。中央の十字架の中に描かれている聖人は、キリストと4名の福音書記者であると捉えた。外側に描かれた聖人を通して十字架に描かれた聖人たちへと祈りを届ける、という点では図2の写本と通じるものがあるのではないだろうか。



図7 Basilica of S. Mark-Mascoli's Chapel :The Visitation and the Dormito Virginis (当該教会で購入したポストカードより)

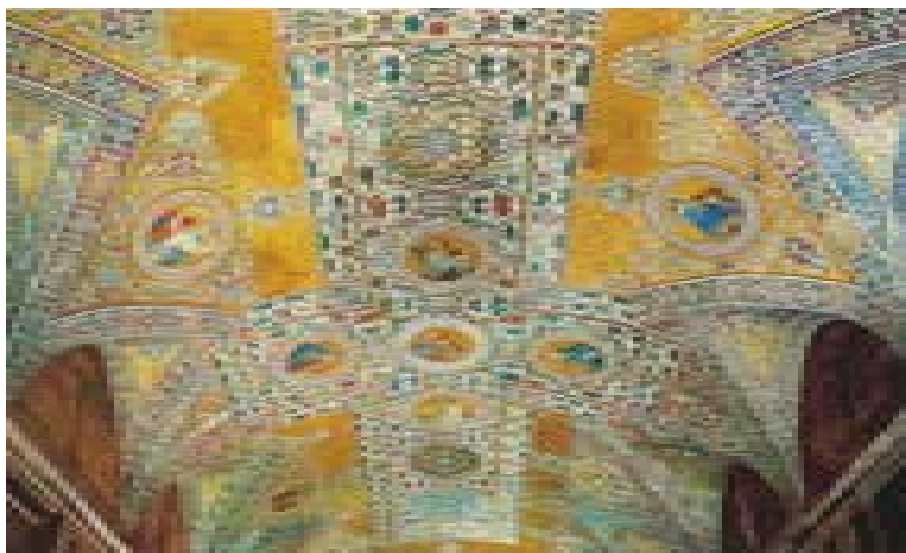


図8 SAN MARCO Basilica (当該教会売店のポストカードより)

まとめ

マルモッタン・モネ美術館では上記以外の写本もみることができたのだが、その中でも特に印象深かったものとして、ページの大部分をキリストの十字架刑のシーンの挿絵が占めた写本の一ページがある。この写本はページ下部に文章があり、その周りに散りばめられた円の中にキリストの生前のエピソードが描かれていた。そのエピソードが描かれた円同士は渦を巻く蔦草によって結ばれていた。この一枚の中では、蔦草は複数のエピソードの間を結ぶ役割も果たしている。

またサン・マルコ寺院の展示室では、写真を撮ることはできなかったものの典礼聖歌の彩色写本を観察調査することができた。楽譜の行間に草花の蔓が渦を巻いて入り込んでいるもの、ページの中に挿絵がいくつも描かれているもの、ページの端にだけ蔦草の装飾のあるもの、また写本の表紙に金属の装飾で渦を巻く蔦草の模様が施されているものなど、一言で楽譜の装飾といえども多様性があることが理解できた。

上記のことも含めて、聖書の写本という聖なる空間に現れる渦巻には人々の祈りや願いを、次元を超えて神のもとへ届けようとする役割があるのではないだろうか。

今回の研究旅行を通して、螺旋の意匠が単なる装飾としての機能だけでなく、時にそれを越えた何らかの意味を付与された、そのような彩色写本の作例も存在するということを確認することができた。さらに、それらの装飾は、無法に行われたものではなく秩序あるものだということが、今回見た写本装飾の中で実感した。また、文献の写真で見るだけでなく実物を見ることで、装飾の職人技やその繊細さをより認識することができた。さらに、写本だけでなく教会建築にみられる螺旋を見ることで、キリスト教における螺旋装飾の多様性を確認することができた。加えて、日本に帰ってきて改めて『ヨーロッパの装飾文様』ⁱⁱを確認したことで、今回見た蔦草の装飾の一部は、古代ギリシアの柱頭装飾をはじめとしたヨーロッパで最も息長く普遍的に用いられるアカンサスの意匠に分類される可能性があることを知った。これについては、今後の研究課題としたい。最後に、彩色写本にみる文字装飾における螺旋意匠は、単なる装飾を越えた何らかの意味内容を伝達する媒体としての機能を持つ可能性が存在することを、複数の作例の観察を通して確認することができたことは、今後の卒業論文に向けた筆者の研究に大きな収穫をもたらすものであった。

ⁱ 鶴岡真弓 『すぐわかるヨーロッパの装飾文様—美と象徴の世界を旅する—』、東京美術、2013年 60頁

ⁱⁱ 同上 58-59頁参照

ⁱⁱⁱ 同上 30項参照

参考文献

鶴岡真弓『すぐわかるすぐわかるヨーロッパの装飾文様—美と象徴の世界を旅する—』、
東京美術、2013年

篠田知和基 『ヨーロッパの形—螺旋の文化史—』 八坂書房、2010年